

木村 直弘

〈多様ノ統一ノ原理〉再考

——宮沢賢治におけるフェヒナー、リップス、田中智学との思想的結節点をめぐって——

「多様における統一」は、西洋美学史ではお馴染みのキーワードで、大正期に上梓された美学書も殆どがそれについて言及している。発表者は、新校本第13巻（下）所収の〈思索メモ5〉「◎多様ノ統一ノ原理／◎美的明瞭性ノ原理」に着目し、このメモや、農民藝術概論網要に見られる「静藝術」という術語が、精神物理学及び実験美学の祖 G. Th. フェヒナー由来であることを、最新稿で明らかにした（『賢治学』第6輯、2019年7月、201-225頁）。それをふまえ、本発表では、現存する賢治蔵書 Th. リップス『美学大系』において賢治が傍線を付した箇所が多くが「多様ノ統一ノ原理」に関わる内容であることを指摘したのち、明治期にすでに訳書が出ていたフェヒナー『死後の生活』に示された死生観や、「多様ノ統一ノ原理」を含むフェヒナーの美学思想が、農民藝術概論などに示された賢治の思想にいかにか影響を与えていたかについて明らかにする。

サクシ・シリ

宮沢賢治の作品における中心と周縁

本研究は「宮沢賢治の作品における中心と周縁」と題し、『風の又三郎』、『祭りの晩』、『山男の四月』という3つの作品を分析し、それらが当時の社会的現象とどのように関連しているかを考察することを目的としている。

当時の日本には、東京中心の考え方が強かった。それは地理的な意味と言語的（方言）な意味の両面で該当した。彼の出身地である岩手は東京から地理的に遠かった。「標準語運動」によって、政治上の力の不平等とともに、賢治の地元は言語上の地位も引き下げられ、中心と周縁の差はより明白になる。

本研究は、中心と周縁の観点から批評的にアプローチすることにより、宮沢賢治の作品を新しい次元でとらえる可能性が開けるといって意義があり、宮沢賢治の作品における中心と周縁は、当時の政治的出来事に関係があり、「力」と「支配」の現象について、彼の考えが強く反映されているという仮説を持っている。

堀内 克丸

「絵画」表象から観た賢治文学 ——「月夜のでんしんばしら」の表象検証を中心に

宮沢賢治は生涯で数十点の水彩画等を描いている。「月夜のでんしんばしら」「日輪と山」「ケミカルガーデン」等であるが、まず

- 1) 「月夜のでんしんばしら」の重要表象を「月」「でんしんばしら」「汽車」と規定し、同時代に生まれた（1897年、賢治は1896年）ベルギーのシュールレアリストの画家ポール・デルボアの絵画の中の表象「月」「電信柱」「汽車」を検証し同時代性を探る。
- 2) 賢治の抽象画をイタリアの同時代、シュールレアリストの画家ジョルジュ・デ・キリコ（1888年生まれ）の絵画と比較して論じる。
- 3) 更に、先行検証の対馬を踏まえ、賢治の抽象画を、萩原朔太郎『月に吠える』の装丁、挿絵を描いた田中恭吉の版画と比較し、検証する。

それらの比較から抽出した絵画の主題等を検証し、賢治にとっての「月」「でんしんばしら」「汽車」の意味を明らかにする事により、賢治文学のさらなる深い解釈を提示する事を本論の目的とする。